

美の観賞会だより 第2号

平成30年9月1日

秋山卓男

美の原点 (2) 太陽

人は美しきものを見たとき我を忘れる。この我を忘れる心の状態が美の原点であると思う。静岡県人は幼い時から駿河湾から登る朝日を見て育ってきた。青く晴れわたった海と空が描く水平線から登ってくる太陽を見ていると、何もかも忘れて自己にハッと気づく時がある。ハッと気づく直前の心の状態を佛教では空(くう)という。空とは、見ている自己と見られている太陽との差別が無くなっている心の状態をいう。ハッと気づいた心の状態を色(しき)という。色では見ている自己と見られている太陽が区別されている。すなわち、差別(色)→無差別(空)→差別(色)という心の変遷を意識しないで自然に行っていることになる。般若心経では、この過程を「色即是空 空即是色」と表現している。

ハッと気づいたその瞬間、人は美を感じるのである。太陽と自分が一体であり、同根であることを感ずるのである。旭日を通して真の実在を感得している。その時、人は生きることの素晴らしさを感じ、人生の全てを肯定する気持ちになる。この状態を善と名付けている。すなわち、真善美がわが心身に実現している瞬間と言ってよい。

人類は太古より太陽を特別の存在ととらえてきた。古代エジプトのファラオ(王)は太陽の化身と考えられ、その権威によって国民を統治していた。

古来、日本人は太陽に美を感じてきた。そして、太陽を神と崇めた。太陽を人格化したものが、日本の祖先神、天照大神である。文字どおり大空を照らす太陽神である。伊勢神宮の内宮に祭られている。

「日出る処の天子、日の没する処の天子に書を致す。恙(つつが)無きや」聖徳太子(574～622)が隋の煬帝(ようだい 569～618)に推古15年(607)7月、第2回遣隋使小野妹子を派遣した時渡した国書の文言である。煬帝はこの書を読み、無礼であると悦ばなかったという。世界共通に崇められている太陽の権威を利用し、大国隋に対し対等な独立国であることを暗に強調する意図を感じたのであろう。聖徳太子は深く仏教に帰依し、「世間虚仮唯佛是真」の言葉を残している。

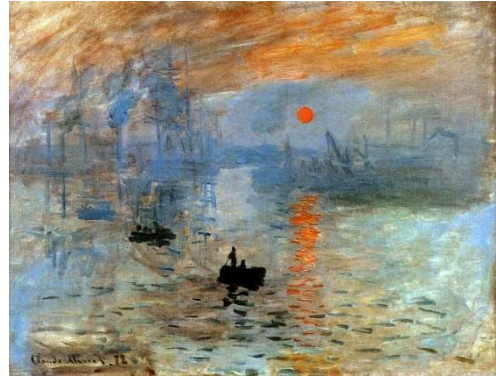
真言宗の御本尊は大日如来である。大日とは、偉大な輝くものを意味し、もとは太陽の光照のことであった。如来と結び付き宇宙の根本佛の呼称となった。

日本真言宗の開祖、弘法大師、空海(774～835)は、若い時、四国の最南端、室戸岬にある洞窟で修業していた。その洞窟の海岸からは朝日と夕日が沈んでいくのが見えるという珍しい場所である。ある日の夜、海辺に立って、明けの明星を見ていると、突然、その星が口の中に飛び込んできたという。見ている自己と、見られている明けの明星が一体となった瞬間であった。その後804年入唐し、青龍寺の恵果和尚のもとで修業し、その法を継いで、僅か2年で日本に戻ってきて、日本真言宗を建立した。今も総本山、高野山には、多くの内外の人が訪れている。

千葉の小湊に生まれた日蓮聖人（1222～1282）は、幼少より太平洋から登ってくる朝日を見て育った。16歳で地元の清澄寺で出家し、修行と勉学に励んだ。京都の比叡山でさらに研鑽し、自分なりの結論を得て清澄寺に帰り、旭ヶ森の山頂に立って、水平線から登ってくる旭日に向かって、初めて、南妙法蓮華経を唱えた。1253年4月28日のことであった。日蓮宗の始まりである。時に、聖人31歳であった。名を蓮長から日蓮とあらためた。如何に太陽に感謝していたかが想像できる。なお、日蓮宗系の出家者は法名の頭に日の字を必ず付けている。

東西の画家達は、日の出の感激を描いてきた。クロード・モネ（1840～1926）は、1874年ナダールのアトリエで開かれたグループ展に「印象一日の出」という作品を出展した。

手前が海と港で小舟が描かれていて、陸地から日が昇ってくる作品である。この作品が評判となり、この作品の名称が、印象派の名前の由来となった。



藤島武二（1867～1943）は横山大観（1868～1958）と一緒に第1回文化勲章を受章した洋画界を代表する作家である。1928年（昭和3年）に昭和天皇の即位を祝うために皇太后から御学問所を飾る油彩画の制作を拝命した。作品は日の出を描くものと決めたもののなかなか満足のいくものがならず、1937年（昭和12年）12月にやっと完成し「旭日照六号」を納めることができた。その他、日の出をテーマにした多くの傑作を残している。「港の朝陽」「蒙古の日の出」「日の出」「神戸港の朝陽」「大王岬の日の出」がある。

岡本太郎（1911～1996）は大阪万博（1970）にシンボルタワー、高さ70mの太陽の塔を作成した。大阪の千里丘陵で現在も威容を誇っている。「芸術は爆発だ」という名言を残している。「芸術とは、生きることそのもの。爆発とは、ドカーンと破裂するのではなく、宇宙に向かって精神が、いのちがぱあっとひらくこと」と言っている。

「白地に赤く、日の丸染めて、ああ美しや、日本の旗は」と文部省唱歌「日の丸の旗」で歌われている日本の国旗は、数ある国旗の中で最もシンプルであると思う。この国旗に美を感じずる人は多いであろう。

日本は周囲を海に囲まれて、漁業が盛んである。広い海原に出て漁をする漁師はいつも太陽と一緒にいる。朝日夕日を見ながら仕事をしていると、心は自然に無心の状態になる。大漁の時は、ハレの気持ちになる。その気持ちを旗にしたのが大漁旗である。旗の意匠は富士山と太陽と一緒に描かれているものが多い。この旗がなかなか美しいのである。大漁旗をネットで検索すると、たくさんの大漁旗を見ることができる。

次号は、美の原点（3）花 を発行いたします。